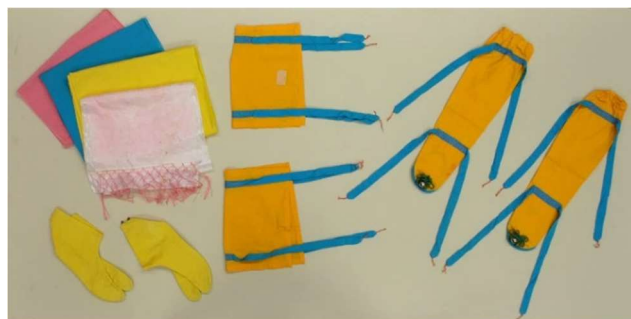


晴れ舞台を彩る衣装は家族の手で

しもがさ

下笠のサンヤレ踊り 子役衣装 (草津市蔵)



左：長着
上：左から襷、足袋、
脚絆、手甲
右：着用時の様子



「サンヤレ」という囃子詞で知られる「草津のサンヤレ踊り」は、草津市内の矢倉・下笠・片岡・長束・志那・吉田・志那中の7地域で5月3日に踊られる伝統芸能です。「サンヤレ」という言葉の語源ははっきりとは分かっていませんが、「幸あれ」という意味であるとも言われます。

華やかな扮装で「サンヤレ」と短い囃子詞を繰り返すサンヤレ踊りは、中世に京都で流行した疫病除けの芸能である「風流囃子物(ふりゅうはやしもの)」の系譜を引くとされ、その古い形を今に伝えています。令和4年11月には、栗東市の「小杖神社の芸能祭礼」とともに『近江湖南のサンヤレ踊り』が、全国各地の「風流踊」のひとつとしてユネスコ無形文化遺産に登録されました。

サンヤレ踊りの特徴と言えば、着飾った子どもたちを中心に、鼓や太鼓、笛、ササラなどの楽器で囃し立てながら踊ることですが、中でも「下笠のサンヤレ踊り」は色鮮やかな衣装を身に付けることで知られています。子どもたちの衣装

は特に華やかで、吉祥文様の長着に色とりどりの襷などを身に付け、頭に花笠を被ります。

この衣装は、かつて太鼓打ちをつとめた家から寄贈いただいたものです。平成10年(1998)に当時小学校6年生だった男性が着用しました。長着は本人の体に合わせて仕立てられたもので、襷や手甲、脚絆、長着の装飾、足袋などは家族で作ったそうです。「手甲や脚絆に紅白の糸で刺繍を入れる」「白い足袋を黄色に染める」「編んだ組紐を鈴とともに長着に縫い付ける」など、家族によって、ひとつひとつ丁寧に用意され、名誉ある大きな舞台に立つ子へ気持ちを感じさせます。

近世の衣装だけでなく、このような現代の衣装からも、伝統芸能がどのように継承されてきたのかを一端垣間見ることができ、継承の歴史を知る貴重な資料と言えます。

(令和6年5月・草津宿街道交流館 岡田 裕美)